

養護教諭養成課程における多職種連携に関する学生の学 び

-チーム学校の専門スタッフとの連携に焦点を当てて-

Students' Learning through Interprofessional Collaboration in School Nurse Training Course
Focusing on Collaboration with Expert Staff in Schools as Team-based Organizations

相楽直子

Naoko SAGARA

宮城大学看護学群

School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】

多職種連携, チーム学校, 養護教諭, 社会
福祉士, スクールカウンセラー

Interprofessional Collaboration,
team-based school,
school nurse,
social worker,
school counselor

【Correspondence】

相楽直子

宮城大学看護学群

sagaran@myu.ac.jp

【Support】

本研究は JSPS 科研費 20K13977 の助成
を受けた。

【COI】

本論文に関して、開示すべき利益相反関
連事項はない。

Received 2022.05.26

Accepted 2022.09.13

Abstract

The purpose of this study was to clarify the curriculum of the "practices of collaboration with expert staff in a team-based school" class conducted for the school nurse training program students at A University, and to provide data for the development of an educational program for Interprofessional collaboration for the same course. The class was conducted twice, with a school counselor and a social worker as guest teachers, respectively. Based on the qualitative analysis of the students' feedback, the following were extracted as main categories; (1) schools as team-based organizations, (2) expert staff, and (3) the role of school nurses. In addition, items related to expert staff's jobs in school, support practices by teams, and collaborations with expert staff were also included in categories and sub-categories. The results suggested that students obtained practical learning relevant to school settings by listening to the school counselor and school social worker, both of whom served as expert staff. It was also clear that the students gained rich learning experiences regarding the concept of schools as team-based organizations, which was the goal of conducting the class, along with beneficial collaborations with internal and external staff members and relevant organizations.

はじめに

文部科学省中央教育審議会(2015)は、不登校やいじめ、虐待など、深刻化・複雑化する子どもたちの課題解決に向けて、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」(以下チーム学校)を提言し、学校がチームとして組織的に対応することを示している。チーム学校の実現に向けては、「専門性に基づくチーム体制の構築」が必要であり、「教員が多様な専門性や経験を有する専門スタッフ等との多職種連携を図る学校組織の変革を進めること」、「チームを構成する個々人がそれぞれの立場・役割を認識し、学校の課題への対応等に取り組むこと」が示されている。関連して、「令和の日本型学校教育」(文部科学省中央教育審議会, 2021)では、「連携・分担による学校マネジメントの実現」が示され、「学校内においては、教師とは異なる知見を持つ外部人材や、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の専門スタッフなど、多様な人材が指導に携わることができる学校を実現することが求められる。」と明記されている。

実際、学校ではスクールカウンセラー(以下 SC)やスクールソーシャルワーカー(以下 SSW)等の多様な専門スタッフの配置・活用が急ピッチで進められている。SCについては、1995年スタートした「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」から20年以上経過した。現在では、大部分の小・中・高校にSCが配置されており、教員や保護者と連携し児童生徒への対応がなされている。半田(2020)は、チーム学校におけるSCの活動について、「子どもの個別カウンセリングにとどまらず、連携や協働の中で、子どもの生きる力を育て定着させていくことに幅広く取り組んでいくこと」と報告している。今後は、SCがチーム学校の一員として、組織的に連携や協働を図ることが一層求められるだろう。しかしながら、SCが非常勤という立場から勤務時間・日数が限定され、教員と協力体制を取りにくい状況にあること、校内支援体制の中でSCの果たすべき役割が明確になっていないことなども指摘されている(国立特別支援教育総合研究所, 2022)。

SSWについては、2008年に文部科学省が「スクールソーシャルワーカー活用事業」を創設し、2009年より都道府県・政令指定都市・中核市を対象とする補助事業が開始された。SSWは、子どもの権利条約や改正児童福祉法を法的な支えに、子どもの最善の利益を保証し、教育と福祉をつなぐ役割を担う専門職である(鈴木, 2021)。SSWの活動の特徴については、「児童生徒という個人だけでなく、児童生徒の置かれた環境にも働きかけ児童生徒一人一人のQOL(生活の質)の向上とそれを可能とする学校・地域を作る」と明記されている(文部科学省, 2017)。

チーム学校においてSC、SSW等の専門スタッフが機能するためには、多職種のメンバーをつなぐコーディネーターが必要であり、その一人として養護教諭がいる。日本学校保健会(2021)は、これからの学校保健に求められている養護教諭の役割として、「学校内及び地域の医療機関等との連携を推進する上でコーディネーターの役割」「いじめや児童虐待など児童生徒等の心身の健康課題の早期発見、早期対応」「専門スタッフ等との連携協働」をあげている。健康面に課題のある子どもには、養護教諭のもつ学校保健のネットワークを活用し、校内外の多様なメンバーによるチームでの支援が有効であることも報告されている(相楽・石隈, 2011)。

ところで、2015年の文部科学省中央教育審議会答申では、教員の資質向上について、大学と教育委員会による養成・採用・研修の接続の強化と一体化を図るよう提言がなされ、教員育成指標が示されている(文部科学省中央教育審議会, 2015)。その中には、養護教諭の経験年数に応じた保健組織活動に関する内容が項目立てされている。例えば、仙台市教育委員会(2020)は「求められる養護教諭の姿と力量(2020年度版)」において、6~15年養護教諭経験者に「保護者、地域、関係機関との関わりを深め、連携・協働して対応する。」が明記されている。

一方、養護教諭養成段階においても、「養護概説」「健康相談活動」「学校保健論」等の科目で、校内外の関係職員との連携や協働についての学修が位置付けられている。例えば、日本看護系大学協議会養護教諭養成教育検討委員会(2017)は、「看護学士課程で養成する養護教諭のコアコンピテンシー」として、「V群：多様なケア環境とチーム体制に関する実践能力」をあげ、「学校内外の組織や社会資源を活用し、チームで支援する体制を構築・支援する能力」が示されている。これらことから、養護教諭養成段階から教員研修に至るまで、系統的に多職種連携・協働を学ぶこ

とが重要であり、段階に応じた教育・研修プログラムを構築することが必要であると考えられる。

養護教諭の多職種連携に関するプログラム研究を概観すると、養護教諭と教員の養成課程の大学生を対象とした「模擬ケース会議」の実践(荊木・森田・鈴木, 2018)や、養護教諭と栄養教諭の養成課程の大学生を対象とした保健・栄養指導等の演習プログラムの検討(水津・丹, 2017)、養護教諭と社会福祉士の養成課程の大学生を対象に行った多職種連携ワークショップの実践(相楽・平野・荊木, 2021)がある。さらに、養護教諭課程と保健師課程の大学生を対象とした専門職連携教育のプログラム開発と評価(齊藤・朝倉, 2020)では、複数の観点を使用した専門職連携教育プログラム全体の評価についても検討されている。しかしながら、学校における多職種連携を促進する教育プログラムの検討は始まったばかりであり、教員養成から現職研修に至る各段階に応じた多職種連携の教育プログラムを構築することが喫緊の課題であろう。

以上のことを踏まえ、本研究では養護教諭養成課程において、ゲストスピーカーによる多職種連携に関する授業を実施し、教育上の有用性について検討する。

本研究の目的

本研究では、養護教諭養成課程において、チーム学校の専門スタッフ当事者をゲストスピーカーとした授業を実施し、学校における多職種連携の必要性・重要性を学生が理解する上で有用であることを明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 研究対象者

A 大学看護学士教育における養護教諭養成課程の4年生で、後期科目「教職実践演習」を受講した12名のうち、本研究の説明をうけ参加の同意が得られた者。学生は全員看護師国家資格、養護教諭1種免許状の取得をめざしている。本授業開始前に養護実習、及び看護実習を終了している。

2. 研究期間

X年5月～X+2年3月 期間の内訳は、X年5月～11月まで授業の検討・調整、X年12月に授業実施、学生の成績確定後であるX+1年3月～X+2年3月をデータ分析期間とした。

3. 分析対象とデータ収集方法

教職実践演習「SCとの連携の実際」(1コマ)、「SSWとの連携の実際」(1コマ)において、事後学修として学生が「学んだこと、感じたこと・考えたこと」に関する自由記述を求め、同意が得られた学生の分を分析データとした。データ収集は、学生の成績確定後に学習管理システムに提出された中から、同意が得られた学生のデータを抽出し、個人名が特定されないよう無作為のアルファベットを振ったうえで、パスワード付きの別ファイルに保存した。

4. 分析方法

自由記述について、テキストデータから帰納的にカテゴリーを構築し分析を進める「テーマ中心の質的テキスト分析」(Kuckartz, 2018)を行った。分析は質的分析ソフト MAXQDA2022 Analytics Pro を使用した。

5. 倫理的配慮

本研究は、宮城大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:第713号)。研究対象者には、研究協力は自由意思であり、同意しない場合や同意したが協力を撤回する場合に不利益を被ることは一切ないことを説明した。次に、研究協力で同意をする場合、あるいは同意をしたが撤回する場合、所定の同意書または撤回書を学内に設置した鍵付きのボックスに提出すること、成績確定後に同意書や撤回書の提出状況を確認し分析を開始することを説明した。

6. 多職種連携に関する授業の概要

A 大学養護教諭養成課程では、教職実践演習4コマ分を学校における多職種連携を学ぶ機会とし教育プログラムの試行を行なっている(表1)。プログラムにおける学生の到達目標は、①チー

Miyagi University Research Journal

ム学校について理解し説明できる, ②児童生徒にかかわる校内外の関係者・関係機関の役割や機能, 強みについて理解する, ③児童生徒・保護者, 関係者, 関係機関等によるチームでの支援を計画・実施・評価・改善するための知識や方法を身につけるのである。本研究では上記①と②に着目して内容を構成した。

(1) 受講生

受講者は A 大学看護学士教育において養護教諭養成課程を履修している 4 年生 12 名。

(2) 時期

多職種連携に関する授業(4 コマ)は, X 年 11 月~12 月とし, 本授業(2 コマ)は X 年 12 月とした。

(3) 授業形態と内容

チーム学校の専門スタッフであり, 養護教諭と連携する機会が多い SC, および SSW をゲストスピーカーとした。事前に A 大学養護教諭養成課程の多職種連携に関する教育プログラムの概要(表 1)をお伝えし, チーム学校, 養護教諭と専門スタッフとの連携の実際に関する内容とすることを依頼した。

1) 1 回目「SSW との連携の実際」

<授業形式> リアルタイムオンライン(Zoom)の配信を講義室の電子黒板に投射し受講するサテライト形式とした。

<ゲストスピーカー> B 氏 自治体における SSW, およびスクールスーパーバイザーとして勤務。大学の非常勤講師を兼任。専門は, スクール(学校)ソーシャルワーク, 児童家庭福祉, 学校心理学。

<授業概要> ①児童・生徒支援に関する状況について, ②スクールソーシャルワーク, スクールソーシャルワーカーについて, ③SSW の学校との連携。

2) 2 回目「SC との連携の実際」

<授業形式> リアルタイムオンライン(Zoom)を各自が受講する形式とした。

<ゲストスピーカー> C 氏 複数の小・中・高校の SC として勤務。大学の非常勤講師を兼任。専門は学校心理学, 特別支援教育, 教育心理学。

<授業概要> ①チーム学校の基本理念: 指導と支援, ②支援の実態: 勤務校の状況, 各学校の特徴, ③支援の課題: 支援の難しさ, 養護教諭と SC の連携の課題。

表 1 学校における多職種連携に関する授業スケジュール

| |
|---|
| <p>1. 「チームとしての学校の実現」に向けて (対面形式・90分) 学校における多職種連携とは 多職種連携ワークショップの説明・職種紹介の準備</p> <p>2. 多職種連携ワークショップ (リアルタイムオンライン・サテライト形式・90分) 4職種(教諭、養護教諭、心理職、社会福祉職)養成課程合同実施 グループワークにおける職種紹介・質問会</p> <p>3. スクールソーシャルワーカーとの連携の実際 (リアルタイムオンライン・サテライト形式・90分) ゲストスピーカーによる講義・質疑応答</p> <p>4. スクールカウンセラーとの連携の実際 (リアルタイムオンライン・各自受講・90分) ゲストスピーカーによる講義・質疑応答</p> |
|---|

結果

1. データの概要

研究協力が同意が得られた 9 名分のデータを匿名化しパスワード付きの別ファイルに保存し分析を行った。分析データの総文字数は, 1 回目「SSW との連携の実際」では 6676 字, 2 回目「SC

Miyagi University Research Journal

との連携の実際」では 7009 字、コード付きセグメント数は 1 回目では 132 件、2 回目では 114 件であった。

2. 1 回目：「SSW との連携の実際」での学び

1 回目の授業における学生の自由記述についてテーマ中心の質的テキスト分析を行なった結果、図 1 のようにカテゴリー化された。以下、メイン・カテゴリーを【】、カテゴリーを〈〉、サブ・カテゴリーを『』、データ件数を()内に記す。

学生の学びは、【チーム学校・チーム支援】(30)、【スクールソーシャルワーク・スクールソーシャルワーカー】(31)、【養護教諭の役割】(19)の 3 つのメイン・カテゴリーに分類された。さらに、【チーム学校・チーム支援】については、〈チーム学校の理念〉(6)、〈チーム支援の実際〉(13)、〈専門スタッフ・関係機関との連携〉(9)、〈他職種の理解〉(2)の 4 つのカテゴリーが含まれた。〈チーム学校の理念〉の典型例には「難しい問題は学校内で解決しようとするのではなく、積極的に専門性を持つ職員に委託することも大切だということを学んだ。」があった。【スクールソーシャルワーク・スクールソーシャルワーカー】については、〈スクールソーシャルワークの歴史・制度〉(6)、〈スクールソーシャルワーカーの支援〉(26)の 2 つのカテゴリーが含まれた。さらに〈スクールソーシャルワーカーの支援〉は、『環境面への着目』(13)、『コーディネート』(7)、『子ども尊重の姿勢』(6)の 3 つのサブ・カテゴリーが含まれた。『環境面への着目』の典型例には「SSW は、子どもたちの環境に注目して支援に携わる役割がある。」、『コーディネート』の典型例には「SSW が介入し、行政や他の関係機関へ適切につなぐことで、問題の解決に進むことができるようになって感じられた。」があった。【養護教諭の役割】については、〈問題の早期発見・対応〉(5)、〈問題状況のアセスメント〉(7)、〈コーディネート〉(7)の 3 つのカテゴリーが含まれた。〈問題の早期発見・対応〉の典型例には「普段から情報収集を意識した関わりが重要であり、問題の早期発見に繋げることが大切であると感じた。」、〈問題状況のアセスメント〉の典型例には「養護教諭は虐待や栄養状態不良など家庭環境が見えやすい場所であると同時に、保健室という環境や養護教諭だからこそ話してくれることもあるため、教室だけでは見えない児童生徒の側面や家庭環境といった生活背景、そして思いや悩みの情報をキャッチできる重要な役割を担っていると学んだ。」、〈コーディネート〉の典型例には、「いくつかの事例を聞いて、養護教諭が虐待や発達障害等の第一発見者となることが多いことが分かり、見つけた問題を養護教諭や管理職等教職員だけで抱え込むのではなく、迅速に、必要な専門職につなぎ、支援していくことが子どもを守ることに繋がると改めて理解することができた。」があった。

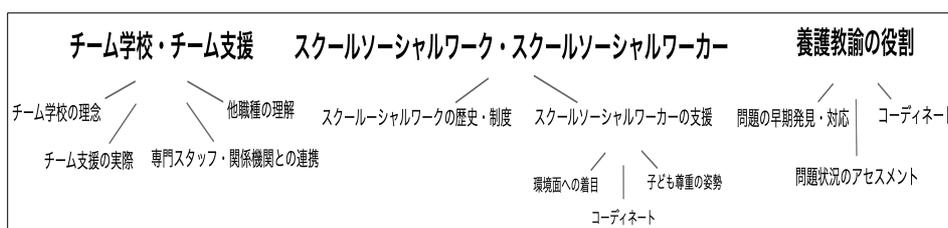


図 1 「学校における多職種連携 SSW との連携の実際」における学び

3. 2 回目：「SC との連携の実際」での学び

2 回目の授業における学生の自由記述についてテーマ中心の質的テキスト分析を行なった結果、図 2 のようにカテゴリー化された。以下、メイン・カテゴリーを【】、カテゴリーを〈〉、データ件数を()内に記す。

学生の学びは、【チーム学校・チーム支援】(26)、【スクールカウンセラー】(23)、【養護教諭の役割・専門性】(20)の 3 つのメイン・カテゴリーに分類された。まず、【チーム学校・チーム支援】については、〈養護教諭とスクールカウンセラーの連携の実際〉(6)、〈チーム支援の実際〉(11)、〈専門スタッフ・関係機関との連携〉(4)、〈自他職の役割・専門性の理解〉(5)の 4 つのカテゴリーが含まれた。〈養護教諭とスクールカウンセラーの連携の実際〉の典型例には「事例を紹介しても

Miyagi University Research Journal

らったことで、養護教諭とスクールカウンセラーの連携の場は本当に数多くあるということが分かった。」があった。【スクールカウンセラー】については、<学校・児童生徒のアセスメント>(5)、<児童生徒・保護者へのカウンセリング>(6)、<教職員へのコンサルテーション・研修>(8)、<支援体制の整備>(4)の4つのカテゴリーが含まれた。<学校・児童生徒のアセスメント>の典型例には「学校の特色や支援体制，地域，保護者の特性など，様々なことを把握しておくことが必要になると思った。」があった。【養護教諭の役割・専門性】については、<問題状況のアセスメント>(6)、<インテイク>(4)、<コーディネート>(3)、<指導と支援の専門性>(6)の4つのカテゴリーが含まれた。<問題状況のアセスメント>の典型例には「子どもたちの問題を捉えるには，背景をつかむことが大切である。その中で，家庭環境が子どもたちの心身の健康に大きな影響を及ぼしている場合が多くあると考えられる。」、<コーディネート>の典型例には「子どもの心理的な課題に気づきやすい養護教諭という立場を利用して，積極的にスクールカウンセラーにつないで，子どもの成長のために努めることが大切だということや，子どもの心理的な課題に気づく力が重要になるということ」を学んだ。」があった。

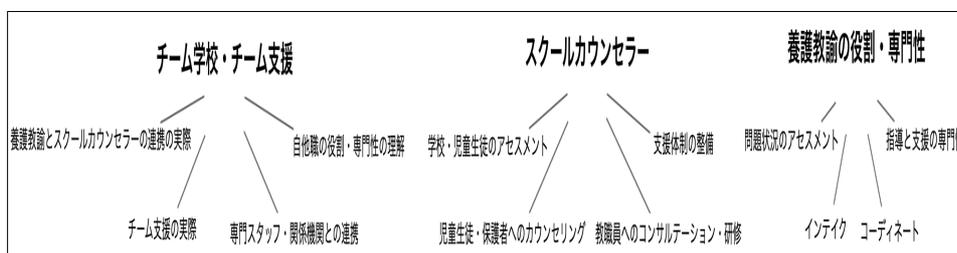


図2 「学校における多職種連携 SC との連携の実際」における学び

考察

1. 学生の学びと目標に対する評価

2回の授業の自由記述から作成されたメイン・カテゴリーを内容ごとに整理すると、「学校組織と支援：【チーム学校・チーム支援】」，「専門スタッフ【スクールソーシャルワーク・スクールソーシャルワーカー】・【スクールカウンセラー】」，「養護教諭の役割と専門性：【養護教諭の役割】・【養護教諭の役割・専門性】」に分類できる。これらを多職種連携に関する教育の到達目標「①チーム学校について理解し説明できる，②児童生徒にかかわる校内外の関係者・関係機関の役割や機能，強みについて理解する」に照らし合わせると，概ね目標は達成されたものと考えられる。しかし，目標②については，SCやSSW，養護教諭に関しては多数かつ具体的な記述が見られていたが，それ以外の関係者・関係機関に関する記述は少なかった。本授業の構成から想定された結果ではあるが，目標に到達するためには，校内外の関係者・関係機関について他の科目等で学んだことを確認したり，補足したり，本時の内容と関連付けたりすることが必要であると考えられる。

2. チーム学校・チーム支援に関する学び

【チーム学校・チーム支援】に含まれるカテゴリーに着目すると，その特徴から，「①チーム学校の理念：<チーム学校の理念>」，「②チーム支援の実際：<チーム支援の実際>，<養護教諭とスクールカウンセラーの連携の実際>，<専門スタッフ・関係機関との連携>」，「③チームに必要な姿勢や態度：<他職種の理解>，<自他職の役割・専門性の理解>」に整理できる。チーム学校の理念に基づき，チーム支援が展開され，そこで必要となる構成員としての姿勢や態度に気づく，といった学びのプロセスがうかがえる。さらに，「②チーム支援の実際」に着目すると，養護教諭，SC，専門スタッフ，関係機関が含まれており，多職種によるチーム支援の必要性・重要性を改めて認識する場になっていたことがわかる。鈴木(2020)は，教職員のみならず，教員養成段階において「チーム学校」を学ぶことが，学校と地域の社会資源・専門機関等の包括的な連携を生み出す基礎となることについて指摘している。以上のことから，学生にとって「チーム学校」の学習は，学校における多職種連携に関する実践的な学びを得られる貴重な機会となっていることが示

Miyagi University Research Journal

唆される。

3. 専門スタッフに関する学び

メイン・カテゴリー【スクールソーシャルワーク・スクールソーシャルワーカー】、【スクールカウンセラー】には、SSWやSCが実際に行なっている活動内容、そこから見出された役割・特徴などが含まれていた。SSWについては、<スクールソーシャルワーカーの支援>において、『環境面への着目』『コーディネート』『子ども尊重の姿勢』の3つのサブ・カテゴリーが示された。これらは、文部科学省(2017)が示す「(SSWは)児童生徒という個人だけでなく、児童生徒の置かれた環境にも働きかけ児童生徒一人一人のQOL(生活の質)の向上とそれを可能とする学校・地域を作る」と一致しており、学生がSSWの特徴を適切に捉えていることが確認された。加えて、特徴的なことは、カテゴリー<スクールソーシャルワークの歴史・制度>が生成されたことである。2009年より都道府県・政令指定都市・中核市を対象に「スクールソーシャルワーカー活用事業」が開始されているが、一般的に見てSCに比べてSSWに関する認知度は低い状況にある。本授業では、学生がゲストスピーカーであるSSW当事者より、スクールソーシャルワークの歴史やSSW活用事業など、基本的な事項から最新の状況を知る貴重な機会となっていたことがうかがえる。

SCについては、<学校・児童生徒のアセスメント>、<児童生徒・保護者へのカウンセリング>、<教職員へのコンサルテーション・研修>が示され、スクールカウンセリングの基本要素であるアセスメント、カウンセリング、コンサルテーションに関する学びが確認された。さらに、<支援体制の整備>が示されており、SCは個別の支援にとどまらず、教員集団や学校組織等のシステム全体を支援の対象としていることも学生が学んでいた。半田(2020)も指摘しているように、今後必要とされる「チーム学校における」SCの役割について、学生が適切に捉えていたと言えるだろう。これらのことから、専門スタッフに関する学習では、時代とともに変化する構成メンバー、その役割や特徴、配置状況等をタイムリーに捉え、情報や知識のアップデートを図ることが重要になると考える。

4. 多職種連携における養護教諭の役割と専門性

メインカテゴリー【養護教諭の役割】【養護教諭の役割・専門性】では、学生がゲストスピーカーの話を聴くことで、多職種連携における養護教諭の役割や専門性について考察を深め新たな気づきを得ている様子がうかがえる。その具体的な内容について述べる。まず、授業の1回目(SSWとの連携の実際)では3つのカテゴリー、2回目(SCとの連携の実際)では4つのカテゴリーが生成され、同義のものを整理すると計5つのカテゴリーとなる。5つのカテゴリーの関係を考察すると、支援の対象となる児童生徒の<問題の早期発見・対応>及び<問題状況のアセスメント>が進められ、当該児童生徒を関係者との支援に誘う<インテイク>や、関係者の連携を促進する<コーディネート>が行われる。そしてこれらは<指導と支援の専門性>により支えられると捉えることができる。養護教諭の多職種連携における一連のプロセスを学生が考察していることが示唆される。

次に1回目(SSWとの連携の実際)、2回目(SCとの連携の実際)に共通しているカテゴリーに着目すると、<問題状況のアセスメント>、<コーディネート>がある。<問題状況のアセスメント>については、【スクールカウンセラー】にも<学校・児童生徒のアセスメント>が生成されている。双方を比較すると、SCは児童生徒のみならず学校や地域全体をアセスメントの対象としていたのに対して、養護教諭は心身の健康面や保健室の機能を生かし、支援対象となる児童生徒の問題状況についてアセスメントを行うことが示されていた。<コーディネート>については、【スクールソーシャルワーク・スクールソーシャルワーカー】のカテゴリー<スクールソーシャルワーカーの支援>におけるサブカテゴリー『コーディネート』が生成されており、SSWは行政等の校外関係機関とのつなぎ役となることに対して、養護教諭は子どもの問題状況に早期に気づきやすい立場を活用し校内・外の関係者につなぐことが示されていた。これらは、学生が養護教諭と他専門職を比較検討し見出した内容である。これからの学校保健に求められている養護教諭の役割として、「学校内及び地域の医療機関等との連携を推進する上でコーディネーターの

役割」「いじめや児童虐待など児童生徒等の心身の健康課題の早期発見、早期対応」「専門スタッフ等との連携協働」があげられているが（日本学校保健会, 2021）、学生が本授業で学んだ多職種連携における養護教諭の役割・専門性である「アセスメント」「コーディネート」と共通していると言えるだろう。加えて、相楽ら（2021）は多職種連携教育ではそれぞれの分野・領域において使用される用語の違いに留意する必要があることを報告しており、「アセスメント」「コーディネート」に関しては、職種の特徴を踏まえながら内容を定義し、養護教諭の役割・専門性として捉えることが必要であると考えている。

ところで、メインカテゴリーの名称について1回目（SSW との連携の実際）では【養護教諭の役割】、2回目（SC との連携の実際）では【養護教諭の役割・専門性】と違いが見られているが、この要因として2点あげる。1点目はSC に比べてSSW に関しては一般的な認知度が低い状況にあることから、学生はSSW に関する制度や支援の理解が中心となり、連携における養護教諭の専門性の考察まで十分には至らなかったこと、2点目は1回目（SSW との連携の実際）の内容を踏まえて2回目（SC との連携の実際）の授業を受講することで、多職種連携に関する養護教諭の専門性に意識が向き考察が深まっていたことが考えられる。多職種連携教育のプログラム構築にあたり、内容の順序性や連続性についても検討することが必要となることが示唆される。

今後の課題と展望

本研究では、チーム学校の専門スタッフであるSC、SSW に焦点をあてて検討した。今後は、多職種連携の視点から、校内外の多様な役割や職種のメンバーについて、学生が何をどの程度学んでいるのかを確認し、学習内容を構成することが必要であろう。さらに、今回のような専門スタッフ等に関する学びを、複数の領域の学生が共に学び合う「多職種連携教育（IPE）」にどのようにつなげ位置付けるのかを検討し、多職種連携教育のプログラムを構築することが課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に感謝いたします。また、授業内容の検討、実施等にご尽力いただいたゲストスピーカーのお二人、宮城大学看護学群特任教員の菱沼ゆう先生に感謝いたします。

文献

- ・半田一郎（2022）スクールカウンセラーと教師のための「チーム学校」入門 第1部「チーム学校」とスクールカウンセラーの役割 第3章「チーム学校」と子どものアセスメント pp 35-36.
- ・荊木まき子・森田英嗣・鈴木薫（2018）模擬ケース会議における学習過程の検討 多職種連携教育(IPE)の教材開発 大阪教育大学紀要 総教育科学, 66, 205-221.
- ・国立特別支援教育総合研究所教育相談情報システム小学校・中学校における特別支援教育スクールカウンセラーをめぐる <http://forum.nise.go.jp/soudan-db/htdocs/index.php?key=muvvmmube-465> 2022年6月29日閲覧
- ・Kuckartz, U. (2018) テーマ中心の質的テキスト分析 質的テキスト分析法：基本原理・分析技法ソフトウェア 佐藤郁哉（翻訳） pp. 97-112. 新曜社
- ・文部科学省中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf 2022年6月27日閲覧
- ・文部科学省中央教育審議会（2015）チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm 2022年6月27日閲覧
- ・文部科学省（2017）児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～（報告） https://www.pref.shimane.lg.jp/izumo_kyoiku/index.data/jidouseitonokyokuusoudannjyuujitu.pdf 2022年6月27日閲覧
- ・文部科学省中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申） https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf 2022年6月27日閲覧
- ・日本学校保健会（2021）学校保健の課題とその対応 -養護教諭の職務等に関する調査結果から 令和2年度改定- p7.
- ・日本看護系大学協議会養護教諭養成教育検討委員会（2017）看護学士で養成する養護教諭のコアコンピテンシーと卒業時到達目標 <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/04/H29YougoKyouyuCoreCompetence.pdf> 2022年6月27日

Miyagi University Research Journal

閲覧

- ・相楽直子・石隈利紀（2011）養護教諭が行う援助チームにおけるコーディネーションの検討 保健室登校の事例を通して カウンセリング研究, 44, 346-354.
- ・相楽直子・平野貴大・荊木まき子（2021）看護士教育の養護教諭養成課程における多職種連携 教育の検討 -チーム学校の実現に向けた多職種連携教育プログラムの試行- 宮城大学研究ジャーナル, 1, 2, 152-162.
- ・齊藤理砂子・朝倉隆司（2020）チームとしての学校づくりを目指した専門職連携教育プログラムの開発と評価の試み- 養護教諭課程と保健師課程に進級予定の大学生を対象に- 学校保健研究, 62, 5, 297-313.
- ・仙台市教育委員会（2020）センター研修 (3)求められる「養護教諭」の姿と力量 2020 年度版 ★専門的資質能力・実践的指導力の向上
https://www.sendai-c.ed.jp/01home/01sougou/06centerkensyu/kencen/R02/0000allpages2020_0331shuusei.pdf
2022 年 6 月 27 日閲覧
- ・水津久美子・丹佳子（2017）養護教諭・栄養教諭養成教育における多職種連携を主眼とした演習プログラムの開発に関する研究 山口県立大学学術情報, 10, 103-113.
- ・鈴木庸裕（2020）学校教育をめぐる多職種連携学習の試行(その 2)- 子どもの学習環境の保証を中心に- 日本福祉大学子ども発達学部論集, 12, 65-73.
- ・鈴木庸裕（2021）学校福祉論入門 多職種協働の新時代を切り開く 第 1 講学校における多職種協働の時代をつくる pp.12-14. 学時出版